



城

第六十七回

ひろさき
弘前城

～嘘までついて再建した天守～

山本 忠博

今回ご紹介する弘前城は、青森県弘前市に在る城です。その天守は、江戸時代後期に建てられたものです。江戸時代以前の天守は全国で12基しか残っておらず、さらに西日本に多く存在しているため、弘前城の天守は、東日本では特に希少な建築物になります。高さは14.4mしかないのに、可愛い天守です。

さて、先程からずっと天守と書いてきました。しかし、弘前城のそれを天守と呼んで良いのかは実は微妙です。その理由も含めて、これから書き進めることにします。

つがるためのぶ
津軽為信と弘前城の築城

弘前城を築き始めたのは、弘前藩初代藩主の津軽為信です。彼は、もともと北東北の名族（甲斐の武田氏と祖が同じ）の南部氏の支族で（諸説あり）、その家臣筋の人間でした。しかし、南部宗家の後継者争いの隙を突いて南部領だった津軽を押領しました。そして、豊臣政権中枢の石田三成に早くから連絡を取り、小田原征伐に向かっていた豊臣秀吉に南部宗家に先んじて謁見して（1590年）、秀吉から津軽4万5千石の領有の承認を取り付けました（第41回九戸城参照）。

為信は、関ヶ原の戦い（1600年）においても、自身と三男の信枚を徳川方とし、長男を石田方につけて、結果として津軽家の存続に成功しました。

そして、徳川幕府の成立の年（1603年）に弘前城の築城に着手しました。しかし、程なくして為信は亡くなったため、築城は一時中断されることになりました。

弘前城の完成

為信の後を継いだのは、三男の信枚でした。信枚は幕府から許可を得て築城を再開させ、1611年にその完成を見ました。

当時の弘前城は、五層の天守を上げており、5万石に満たない藩の城としては大変立派なものでした。これは、幕府が北辺警備を意識して、大きな城の築城を許可した結果と考えられます。

初代天守の焼失

立派な五層の天守は、残念ながら長くはその偉容を保てませんでした。1627年に落雷によって最上層から出火し、火が天守内の火薬庫に回ったため、大爆発と共に吹き飛んでしまったのです。この時の爆発で破片が8km先まで飛散したと言います。

当時の人々は、この大惨事を初代為信の義姉（妻の姉）の祟りだと信じていたようです。初代藩主の為信は、梟雄と呼ぶべき人物で、目的達成のためなら手段を選ばないところがあり、津軽を手中に収める過程で人の恨みを多く買っていました。為信の義姉も、為信に恨みを抱いて不遇の内に死んだとされる人物です。南部一族からの独立を目指す為信に、南部一族だった彼女の夫が殺されたからです。

そんな訳で、燃えさかる天守の中にその義姉が現れ、高笑いをしながら消えていったという話が伝わっています。

と、ここまで為信の嫌な面を目立たせてしまいましたが、一方で義理堅い人物であったことも、付け加えておきましょう。彼は、関ヶ原の戦いの後に、敗軍の石田三成の子供達を、三成からの旧恩に報いるために庇護して血統まで残し（弘前藩3代藩主は、三成の娘の子です）、徳川の世になっても、豊臣秀吉の木像を大事に祀っていたのでした。この木像は今に伝わっています。

ごさんかいやぐら
御三階櫓（現天守）の新造

天守が焼失して200年近く経ったころ、時の9代藩主の津軽寧親が、城の増改築に厳しい幕府に対して、弘前城本丸の櫓の改築を願い出ました。名目は、

海防の為に、櫓を改築して海岸を見張る物見櫓を造るということでした。そして、1811年に御三階櫓と称する三層三階の櫓を完成させました。これが現在では天守と呼ばれる建物です。

と、いうことは、御三階櫓から海が見渡せるのですよね？ ……いえ、まったく見えません。海岸を見張るといのは大嘘です。では、なぜそこまでして御三階櫓を建てたのか？ それは、御三階櫓の外観を観ればなんとなく解ります。御三階櫓の人目につく表側の南面と東面には切妻破風の飾り窓を付け、狭間のみを並べています。狭間は狙撃用の小窓なので、普通の窓より小さいため、建物を大きく見せる効果があります。一方で裏側の北面と西面は窓があるだけで殺風景です。御三階櫓を表から見たのと裏から見たのとでは、まったく別の建物に見えます(それで、私は「びんぼっちゃま」(ある漫画のキャラクター)を思い出します。弘前城ファンの皆さん、すみません)。内部構造も簡素な造りです。これらの構造は、人目に着くところだけでも見映えのする建物を置きたいという意図の表れだと思います。

この頃の日本の北辺にはロシア船が現れるようになっており、弘前藩は蝦夷地警備を幕府から命じられていました。その出費は嵩むばかりで、さらには、1807年に、知床半島の警備に当たられた津軽藩士100名のうち72名が寒さと栄養不足で死亡するという惨事も起こっていました。出費の補填のための重税に対する領民の怨嗟と、藩士の士気の低下を目の当たりにして、寧親としては、威信を示すとともに藩士の士気を高める弘前藩の象徴が欲しかったの

だと思います。幕府の手前、天守は建てられませんし、苦肉の策で三階櫓を天守の代わりとしたのでした。そのため、この御三階櫓は天守としては規模がとて小さいのです。

とはいえ、この御三階櫓を、櫓なのか天守なのかと問われれば、その象徴性からして、天守と言って良いのだろうか、とは思いますが。それに、表側から見た天守は、本当に映えるんですよ。

現在の弘前城

弘前城は、各曲輪(防衛陣地)や堀や石垣の遺構が非常に良く残っているうえに、江戸時代からの建築物として、天守以外に3基の櫓と5基の城門が現存しています。そして、天守以下、いずれも国の重要指定文化財になっています。

ところで、今現在、天守は本来在るべき所には在りません。石垣の修理のために本丸内でちょっと移動しているのです。石垣の修理が当初予定よりかなり遅れているので、元の位置に戻るのはまだ先のようです。この石垣の修理の過程で、石垣の四隅からイカの形をした隅石が発見されており、他にない石垣の構造に城マニアの興味が集まっています。

それから、弘前城と言ったら、桜ですね。明治期に、荒れるに任された城の姿に心を痛めた元弘前藩士二人が、私財を投じて植樹したのが始まりです。私も桜の季節の弘前城を訪れたことがあります。それはそれは見事な景色でした。城内には、現存中で日本最古と言われる推定樹齢140年のソメイヨシノもあります。機会があれば、是非行って見てください。



天守の表側 (提供:弘前公園総合情報サイト)



天守の裏側 (提供:弘前公園総合情報サイト)